

想像の大和路を歩く旅人たち

——堀辰雄の「大和路」を中心に据えて

熊谷昭宏

はじめに

堀辰雄は昭和一八年から昭和一九年にかけて、「大和路・信濃路」という総題をつけた小品のシリーズを発表している。¹⁾このシリーズに属するのは、「十月」「古墳」「斑雪」「櫓の上にて」「辛夷の花」「浄瑠璃寺の春」「死者の書」古都における、初夏の夕ぐれの対話「樹下」の八つである。

これらの初出誌は「樹下」を除いて全て「婦人公論」であるが、単行本への収録の時点に注目すると、昭和二二年に『花あしび』²⁾に収録されたものと、そうでないものに分類することができる。戦後『花あしび』に収録されたものは、配列順にあげると、「樹下」「十月」「古墳」「浄瑠璃寺の春」「死者の書」——古都における、初夏の夕ぐれの対話³⁾である。この作品集『花あしび』の後記で堀は、

想像の大和路を歩く旅人たち

この数年間、私はしばしば大和のほうへ旅をした。さうしてそのをりをりに書いた日記や手紙や小品を集めて、この小さな書を編んだ。

さうしてそれへ「大和路」といふ題を無造作につけておいた儘にしてあつたが、いま上梓するにあたつて、もうすこし私ものらしい、さうしてその古い、なつかしい大和への思慕の表象として、もうすこし *intime* な「花あしび」といふ題を選ぶことにした。

と書いている。つまり、シリーズ全体を「大和路」と「信濃路」に分けた場合、「大和路」系列に相当するのが「花あしび」収録の小品群ということになる。

その中でも「大和路」は、昭和一〇年代に堀辰雄が行った、数回にわたる奈良の旅をもとに書かれている。堀辰雄の奈良旅行につい

ては、早くから谷田昌平氏が実際の旅程と「大和路・信濃路」との関係を実証的に考察している⁽⁴⁾。谷田氏の考察は、「大和路・信濃路」そのものと、堀が知人や妻に宛てた書簡を資料として用いているようだが、いずれにせよ、堀は昭和二年六月から昭和十八年五月の間に、六回奈良を訪れており、「大和路」のモデルとなったのはその間の旅であることがわかる。

堀文学における「大和路」の一群の位置付けとしては、「かげろふの日記」などのいわゆる「王朝小説」執筆のいきさつを探る重要な資料、あるいは古典への関心から大和の地に赴き、その時のことを回想したものである、ということが従来言われてきた⁽⁶⁾。また、それらは戦時の危機感とは無関係な小品群とする研究も多く見られる⁽⁷⁾。

しかし、「大和路」をすべて「王朝小説」に還元してしまうと、小説のように、しかも連載という形で発表された「大和路」各篇の独自性を無視してしまうことになりかねない。また、厳しくなっていた太平洋戦争下の出版事情の中、数カ月にわたって連載を続けていたという事実は、裏を返せば「大和路・信濃路」がある程度時局にふさわしいものと見なされていたということではないか。そして、戦争とは一定の距離をとろうとしていたであろう一作家の名を冠したテキストが、そのように評価されることを可能にする何らかの力が働くことを見逃してはならないだろう。「大和路」で描かれるの

は確かに私的な旅ではあるが、このような旅を簡単に堀辰雄ならではの旅であると言つてよいとは考えにくい。それは同時代の一般的な知識人による観光の、一つの実践と見るべきである。

本稿では、奈良観光についての同時代の言説と「大和路」各篇を比較対照し、そこに描かれた旅の性質を明らかにしようとするものである。そして、そこから昭和一〇年代の知識人の旅と文学の問題の側面を照らし出してみたい。

一 昭和一〇年代の奈良観光と「大和路」

同時代の観光の一つの実践を「大和路」に見ることができると述べたが、ここで観光という言葉を用いるのは、旅行者（見る側）の近代的なまなざしや、そのまなざしに期待どおりこたえようとする観光地（見られる側）の戦略を強調することで、近代の旅に関するテキストの傾向を明らかにするためである。これは「大和路」に関して言えば、モデルとなった作家の旅自体にはそれほどオリジナリティがないことを明らかにすることになる。

それでは、「大和路」の旅の観光としての性格はどのような点にあるのだろうか。そして、昭和一〇年代の典型的な奈良観光と「大和路」との関係はどのようなものなのか。これらの問題を考えてみることにする。

従来、「大和路」を観光という行為の観点から、あるいは「大和路」で描かれる旅を観光であるとして論じた研究はほとんどない。わずかに小川和佑氏がその論文で触れている程度である。これは、作家堀辰雄の旅を高尚で文学的な（ここにも高尚という意味が付与されているようだ）旅であるとする見方が一般化しているという研究の状況があるからであろう。また、『花あしび』の〈後記〉や『堀辰雄作品集第六・花を持てる女』（昭和三年四月一日、角川書店）の「あとがき」での堀の「小説を書きにゆき、それを考へながら」という自注が、観光ではなく取材であるという印象を強めているということもある。

しかし、「十月」などに描かれた小説の構想を得るための旅を、単に取材のための特異な旅と片付けるのは早計ではないだろうか。

以下、同時代、特に昭和一〇年代の奈良観光と「大和路」との関係を考えていきたい。

奈良は平安京より古い都のあった場所、古都、旧都、廢都として日本の歴史の中で動かしがたい位置にあるが、観光地として積極的に観光客を集めるようになるのは、明治以後のことである。¹²奈良の観光地化には、その初期からやはり明治政府の力が大きく働いていた。奈良が日本国民全体の共有財産として生まれ変わるきっかけとなったのは、明治一三年の奈良公園開設の認可であろう。奈良公園

は、当時明治政府太政官の内務卿であった伊藤博文が、堺県令税所篤から内務省に上申されていた公園地確定を認可したことによって誕生した。その後、奈良には、たびたび細かな法令が与えられていくことになり、奈良公園も当初は興福寺近辺に限られていた区域を徐々に拡大していった。そして、明治三九年の鉄道国有化以後、遠隔地からのアクセスが容易になった奈良は、同四二年の奈良ホテル開業に象徴されるように、一気に日本有数の観光地へと変貌していった。

このような純粋な観光地としての奈良の変化は昭和一〇年前後まで続くのであるが、そのような状況の中で発表されたのが、和辻哲郎の『古寺巡礼』¹³や、「十月」で登場する水原秋桜子の『葛飾』¹⁴、高浜虚子の『斑鳩物語』¹⁵などである。そして、これらの「大和路」の先行テキストと平行して、さまざまな奈良観光に関する書物が世に出されていく。それらは、昭和八年刊行の『日本案内記 近畿下』¹⁶などのように、鉄道省などの省庁が編集にあたっていているものが後の同種の書物よりも多い。

だが、さらに注目すべき点は、この時期にすでに名所旧跡の鑑賞のモデルができていたということである。「十月」などにも登場する唐招提寺についての説明を、便宜上ここで比較の対象としてあげてみる。例えば明治三六年刊行の『大和巡』では、寺の沿革に加え、

「仏体亦多く優秀なるものを遺し」「絵画等猶見るべきものあり」「優秀の宝器を蔵するもの少からず」という記述¹⁷が見られる。美術品としての寺宝を紹介するという、現在の旅行ガイドブックに見られるスタイルは、この頃すでに確立していたのである。そして、このような案内書が、「大和路」の先行テキストにあたる数々の紀行文その他に影響を与えることになる。昭和二八年の亀井勝一郎との対談で、その歌が「十月」で引用される歌人会津八一は、奈良についての思い出についてこのように語っている。

亀井 今日、先生が初めて法隆寺においでになつた頃、あの辺の斑鳩の里の景色とか、その頃のいろいろなお話をお伺ひしたいと思います。

会津 私はこの前も申し上げたやうに、法隆寺に関する知識と言ひましても、第一、読むべき本もなかつたんですね。近代的な本はなかつた。¹⁸

このように、「十月」で「僕」が法隆寺で口ずさむ歌を詠んだ歌人も、最初は法隆寺に関する「近代的な」案内書を求めていたのである。そして、旅人（特に知識人）は「読むべき本」を読んで旅に出る必要を感じていたのである。¹⁹しかし、観光地奈良の草創期にあつて、彼らの旅は奈良の発見・発掘という性格が強かつた。

ところが、近代の観光書との相互関係から生まれた『古寺巡礼』

などのテキストが、結果的には次の世代の旅人の「読むべき本」となつていったわけである。そして、「大和路」に描かれた旅もその例にもれない。

昭和一〇年代に入ると、観光地奈良の性格が変化していく。その変化を象徴している文章があるので、それを引用してみる。

今や時局は非常時である。皇軍は北支に上海に戦つて居る。（中略）東洋の安定、延いては世界の平和が齎されるまでは戦はねばならぬ。之に対処するため国民精神総動員運動も開始された。国体観念の再認識と涵養、之が此の総動員の大いな役割をして居る。「大和の史跡」の全部とは言はぬが大部はそれを教へて居る。かゝる秋に此の書を新装をこらして発行することとは感銘深きものがある。

昭和十二年十一月 上海占領の日²⁰

これは、昭和一二年に発行された坂田静夫の『大和史跡名勝案内』（改訂版の序）に書かれているものである。文中に「観光課」「非常時」「国民精神」「国体観念」といった言葉が出てくるが、これらはそのまま昭和一〇年代の奈良観光のキーワードとなる言葉でもある。

奈良市では、昭和四年に市制三五周年を記念して「観光と産業博覧会」を開催し、同年すでに観光課を設置している。それから遅れ

て、昭和十二年の一月、奈良県に観光課が設置された。同じく昭和十二年には県政調査が行われ、観光行政とその計画がまとめられた。そこには、一般県民・公務員・学校生徒・軍人・接客業者などに対する「観光教育」や、県外への観光地奈良の紹介、観光施設・飲食料・土産物などの改善、国宝等の保存などについてさまざまな計画・訓告が並べられている。またこの年、県では最初の風致地区指定が行われた。この時の指定の内容は県政調査に見られるが、それによつて、奈良市などの市町村の中に風致地区が設けられた。「十月」

いま、唐招提寺の松林の中で、これを書いてゐる。けさ新薬師寺のあたりを歩きながら、「或門のくづれてゐるに馬酔木かな」といふ秋櫻子の句などを口ずさんでゐるうちに、急に矢も楯もたまらなくなつて、此処に来てしまつた。

と、また『死者の書』——古都における、初夏の夕ぐれの対話』で、
当分はまあ折を見ては、かうやつてこちらに来て、できるだけ屢々みごとな田園と化した都址や、西の京あたりの松林のかななどをぶらぶらするやうにしてゐる。

と語られる西ノ京一帯も、実は同年五月に風致地区に指定されていた。そこは古都らしく整備・保存された空間なのである。この県の

観光課設置や風致地区の指定は、三年後に控えていた紀元二千六百年奉祝事業という国家的一大イヴェントを準備するための、奈良県の戦略の表れであつた。

問題の昭和一五年からさかのぼること三年前、昭和十二年に紀元二千六百年奉祝会という財団法人が設立された。これは自治体などに委託したりしながら政府の制定した諸事業を施行することを目的としたものであつた。この奉祝会設立後から奈良でもさまざまな動きが見られるようになるのだが、注意したいのは、堀の奈良への旅もその昭和一二年から始まっているということである。

昭和一五年には、従来の観光案内のように名所旧跡を紹介しながらも、それらをすべて二千六百年という創造された歴史の中に位置付けようとする内容の書物が多数出版された。この年は、太平洋戦争開戦の前年で、日中戦争が泥沼化の様相を強めていた。政府をはじめとした国家権力の中核によつて、日本人全体が「同一の起源を持つ国民」という意識をもつて非常時に臨むことを、一層強く期待されていた時期であつた。そのためには紀元二千六百年の記念諸事業はもつてこいのイヴェントであり、それに関わる言説にも、「国民」あるいは「民族」などといった言葉が多く見られることになる。

例えば、昭和一五年に発行された『肇国の聖跡を巡る』の冒頭には、文学博士佐々木信綱が、「聖戦」「皇国」「建国以来二千六百年」「国

民」という言葉をちりばめた文章を寄せている。⁽²¹⁾ その他の紀元二千六百年関連の書物でも、序文などでこれと同様な文章を目にすることができる。

また、紀元二千六百年記念事業に参与したのは国や奈良県やこうした書物だけでなく、鉄道も大きな役割を果たした。昭和四年に生駒山上遊園地を開設し、早くから奈良周辺の観光事業に積極的に関与してきた大阪電気軌道（現近畿日本鉄道）は、昭和一五年には、国鉄や奈良電気鉄道などと提携して、全国からの伊勢神宮、橿原神宮、熱田神宮の「三聖地」参拝客のために増発などの便宜を図って、大きな収益をあげている。⁽²²⁾

さらに諸事業の施行に大きな役割を果たしたのが新聞である。古川隆久氏は、奉祝会と新聞社との共催イベントが事実上一つもなかったことを指摘しながらも、

さて、当然政府及び奉祝会としては、奉祝会開催イベントに少しでも多くの国民が直接あるいはメディアを通じて間接的にも参加することを期待することになるはずである。そして速報性という点で当時最も効果的なメディアがラジオと新聞であったことはいうまでもない。⁽²³⁾

と、諸事業における新聞の役割について述べている。実際に奉祝諸事業が当時の日本国民全体の一大関心事であったとは言いい切れない

が、新聞というメディアはしばしば橿原神宮などの様子を記事にして、それを読む者に奉祝ムードを想像させたのである。

まさに官民一体のプロジェクトによって、鉄のレールが巡礼の道となり、紙面が奉祝事業の現場となったわけである。

そして、「大和路」で回想される旅も例に漏れず、このような政府・自治体・企業・地元住民・観光客のそれぞれの思惑が交錯する現場で行われたのだ。前述した風致地区の問題をはじめ、「大和路」では人々の思惑の交錯は語られぬ空白として存在する。前述した風致地区の問題もその一つである。また例えば、「十月」で語られる、

が、道がいつか川と分かれて、ひとりで西大寺駅に出たので、もうこれまでと思ひ切つて、奈良行の切符を買つたが、ふいと気がかはず郡山行の電車に乗り、西の京で下りた。

という気まぐれな行動や、「古墳」の、

帰りみち、途中で日がとつぷりと昏^くれ、五條野^{ゴジョノ}あたりで道に迷つたりして、やつと月あかりのなかを岡寺の駅にたどりつきました。

というエピソードも、すべて観光、巡礼をめぐる需要と供給がもたらした鉄道網が可能にした出来事であり、記述なのである。つまり、「大和路」で回想される一知識人の牧歌的な旅は、いろいろな政治的な力を基盤にもつ観光の受け皿によって保証されたものだったの

である。

二 知識人にとつての奈良と「大和路」

しかし、知識人の中には積極的にそのような観光の受け皿を問題にする人々もいた。昭和一〇年代には、日本における奈良という都市の位置付けがさまざまな立場からなされた。作家や評論家もそのような、奈良を位置付ける言説を担っていた。「大和路」のオリジナリティを考へるためにも、この時代における奈良の位置付けをめぐる状況を明らかにしたい。

例えば、大正一四年から奈良に在住していた志賀直哉は、昭和三年一月一日発行の「観光の大和」創刊号に、「奈良」というタイトルで近代化する奈良についての提言を寄せている。そこで志賀は、奈良の欠点は税金の高い事だが、県或ひは市がもつと有福になればいいのだらうが、産業を盛んにする為め、煙突が無闇に多くなるやうでも奈良として矢張り考へものである。

結局観光都市として健全に発達する事がいいのだらうが、どうすればいいかといふ事は私には分らない。²⁴

ということを書いている。また、同年二月二四日、二五日の「東京日日新聞」には、「置土産」と題してごく短いエッセイを発表しているが、その中では、

想像の大和路に行く旅人たち

奈良公園から公園と云ふ称呼を去つて、奈良神苑、或ひは何々苑といふやうな、何かいい名を考へ、他の市にある普通の公園からはつきりと此公園を区別して了ふがいいと思つた。

(中略) 或る広ささへあれば何処にでも作れる公園と奈良のやうな千何百年の歴史を持ち、更にそれ以前からの原始林をひかへてゐる自然の庭のやうな公園は一緒にならない。²⁵

と述べている。県や市の観光課の積極的な働きかけには、若干の難色を示しているものの、特別に選ばれた場所として奈良をみつめるまなざしは、この時期としては典型的なものであろう。

もう一人、奈良の位置付けに関与した知識人の代表に、保田與重郎がいる。彼の評論やエッセイでは、日本の古典について述べたものが数も多く有名であるが、奈良という都市についてもいくつかのエッセイで触れている。昭和一三年四月、日本人と奈良の関係について述べた「ふるさとの大和」で保田は、

千三百年の古都奈良もこの頃では近代化した。さうして土地の識者たちには、古都の近代化の必要を考へる人もあつた。

(中略)むしろ古い遊覧都市でよいではないか。(中略)

奈良は日本の故郷である、最も古い歴史の形である。ここだけは永久に日本の古さに止めたいと、私は思ふ。(中略)日本にも、我々の民族の一つの故郷と、一つの形をもつ歴史を残し

ておくことは必要である。⁽²⁶⁾

と力説している。保田は奈良を「日本の故郷」、「我々の民族の一つの故郷」として位置付けている。

実は志賀も「置土産」の中で、奈良について、「日本人は誰しも同じやうに吾々のものといふやうな気持で見えてゐる」という考えを述べているが、あくまでも全国の観光地の頂点として奈良を位置付けているにすぎない。

ただ、「古きよき大和」にこだわるこゝろした知識人の態度は、皮肉にも彼らが嫌う近代化を行つていつた県や市が積極的に運営に携わつた、昭和一五年のイヴェントによる奈良の「聖地化」のおかげで一層強まり、一般化したのである。

一方「大和路」の旅人である作家堀辰雄は、近代化する奈良の姿や聖地への巡礼について語ることをしない。時期的に当然視野に入つていたはずのそれらの問題を黙殺し、空白にしておくということはどういうことなのだろうか。その謎を解くヒントは、『花あしび』の中で最後に配された『「死者の書」——古都における、初夏の夕ぐれの対話』にあると考えられる。「いつまでもその仕事（「客」の構想する新しい小説（引用者注）をつづけてくれたまへ」という「主」の言葉に対する「客」の答えはこうである。

うん、ありがたう。ひとつ一生をかけてもやるかな。（中略）

いつの日にか大和を大和ともおもはずに、ただ何となく小さいな古国だともおもふ位の云ひ知れぬなつかしさで一ぱいになりながら、歩けるやうになりたいとおもつてゐるのだ。たわわに柑橘類のみのつた山裾をいい香りをかいで歩きながら、あこれもおも古墳のあとかなと考へ出すのは、どうもね。

観光客でありながら、自らが観光客であることを忘れ去りたいという矛盾した欲望がそこにはある。彼は折口信夫の「死者の書」⁽²⁷⁾などから触発された想像力によつて作り上げた、想像上の大和に同一化するのを願うのである。しかし、繰り返すが、その同一化は、先に問題としてあげた政治的な力に満ちた観光の受け皿の上で許されることである。

「大和路」各篇には、保田や志賀が声高に主張したような矛盾した近代批判はない。しかし、「何となく」想像の大和を安らぎの場所であると感じようとするこだわりは、一時的にはあるが近代人としての日常生活の忘却を伴っている。

「鹿鳴集」の歌などを口ずさんでは、自分の心のうちに、さういつた古代びとの物静かな生活を蘇らせてみたりしてゐた。

（十月）

いつしかまだすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘はれるやうになつて来ました。

（古墳）

かつての寺だつたそのおほかたが既に廃滅してわづかに残つてゐるきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら（中略）其処にいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもその何処かにすこしく悲愴な懐古的氣分を漂はせてゐる。

（「浄瑠璃寺の春」）

もとより旅にあつてはほどよく感傷的になるのも好いとおもつてゐる私のことだから、それが単なる自己の感傷に過ぎなくて、それもそれで好いとおもつてゐた。

（「樹下」）

これらの個人的な大和への憧憬やなつかしさの背後には、取材をもとに小説を書かなければならないという、近代知識人の一つの姿が隠されている。そして、東京生まれの堀にあつて、大和に対する憧憬やなつかしさは、教育機関で受けた講義や読書によつて得た知識に由来するのである。「大和路」に見られるこの憧憬やなつかしさは、ブックシユな知識が記憶と不可分なものになつていつてしまうことを示していると言えよう。

おわりに

以上、「大和路」に描かれた旅と同時代の観光との関係、同時代の奈良をめぐる想像力との関係などを考えてきた。

堀辰雄は全く個人的な動機から、全く個人的な旅をし、全く個人

想像の大和路を行く旅人たち

的な旅を描いた「大和路」のシリーズを書いた。しかし、その個人的な旅の内容を詳しく分析すると、決してオリジナリテイあふれるものではないことがわかる。「大和路」の旅は、古典文学から想像される古代生活を追体験する試みである。同時にそれは、奈良を歩いた会津八一をはじめとした近代知識人の旅を追体験する試みでもある。

また、同時代の政府や、奈良県、奈良市など地方自治体による奈良の観光地化や聖地化の状況と対置すると、それがいろいろな権力の網の目の中の行動であることも明らかである。その点で、「大和路」の旅は近代的な観光の一つの実践であると言える。旅先での感動は、半ば保護され、用意されていたものなのだ。

そして、「大和路」の旅人は想像の大和に同一化すべく自己を意識的に観光から引き離そうとするが、むしろ想像力の限界と古代日本への「回帰」の不可能性とを露呈することになった。彼のそのような限界の自覚は、保田與重郎のように古き良き時代との断絶、つまり想像力の限界を悲観することではない。「大和路」は古典文学の世界や古代日本にストレートに「回帰」する旅人の回想の記ではない。しかし、日本国民共通の聖地としての意味を付与された奈良（大和）という地名のもつ力が、「大和路」を少なくとも昭和一八年前半において時局に適合するものにしてしまったということは忘れ

てはならないだろう。その点については、今後さらなる考察を加えていく必要がある。

「大和路」各篇の発表、それは、文学から観光へ、観光から文学へという、現在も繰り返される、国民がその国土を代替不可能なかけがえないものとして確認する知識、教養を媒介とした行為の中で起こった出来事なのである。

注

(1) 以下にそれぞれ発表順に初出時のタイトル等を示す。

「大和路・信濃路 一」(「婦人公論」二八一、昭和十八年一月一日)

「大和路・信濃路 二」(「婦人公論」二八一、昭和十八年二月一日)

「大和路信濃路 三」(「婦人公論」二八三、昭和十八年三月一日)

「大和路信濃路 野辺山原」(「婦人公論」二八四、昭和十八年四月一日)

「大和路信濃路 雪」(「婦人公論」二八五、昭和十八年五月一日)

「大和路・信濃路 辛夷の花」(「婦人公論」二八六、昭和十八年六月一日)

「大和路信濃路 浄瑠璃寺」(「婦人公論」二八七、昭和十八年七月一日)

「大和路信濃路 死者の書——古都における、初夏の夕ぐれの話」(「婦人公論」二八八、昭和十八年八月一日)

「樹下」(「文芸」二二一、昭和十九年一月一日)

(2) 昭和二年三月一日、青磁社より刊行された。

(3) 「花あしび」収録時までタイトル等が変わったものを以下に示す。
「大和路・信濃路 一」、「大和路・信濃路 二」→「十月」

「大和路信濃路 三」→「古蹟」
「大和路信濃路 浄瑠璃寺」→「浄瑠璃寺の春」

(4) 谷田昌平「堀辰雄と大和」(「国文学」八一九、昭和三十八年七月二〇日)

(5) 谷田氏の「堀辰雄と大和」(前掲)によれば、昭和十二年六月、昭和十四年五月、昭和十六年一〇月、昭和十六年二月、昭和十八年三月、昭和十八年五月の六回となる。浅田隆氏は、「堀辰雄——鎮魂の旅・奈良」(帝塚山短期大学日本文学研究室編「奈良と文学——古代から現代まで」、昭和十六年七月二〇日、和泉書院)において、昭和十二年六月の二度の日帰りの旅を厳密に分け、七回としている。

(6) 塚田満江「堀辰雄の文学に現れた王朝美——作家研究の試み?」(「女子大国文」三八、昭和四〇年七月五日)、佐藤泰正「堀辰雄・位置と方法」堀辰雄における近代と反近代——その文学史的位相」(「国文学」二二一九、昭和五二年七月二〇日)、谷田昌平「堀辰雄と大和」(前掲)など多数。

(7) 谷田昌平「昭和十年代の作家と批評家」堀辰雄——昭和十年代の堀辰雄」(「国文学」一〇一七、昭和四〇年六月二〇日)、飯島耕一「堀辰雄への違和感」(「ユリイカ」一〇一〇、昭和五三年九月一日)など。

(8) 松田ふみ子「婦人公論の五十年」(昭和四〇年一〇月一八日、中央公論社)によれば、「大和路・信濃路」が連載された昭和十八年の「婦人公論」は、

巻頭(新年号引用者注)には、「若き人達に寄せる——泰公の

誠について——(天野貞祐)が、「公とは自己を否定して普遍的客観的なるものに自己を捧げることである。それは国家的ということになる。それぞれの職域において誠を尽すならば、それは国家全体にかかわることであり、奉公である」と説き、個と全体のつながりと矛盾に解決を与えようと努力した。月を追ひ、日に日に戦争はますます苛烈になり、十八年の七月号を組むころには、目次はわずか一頁で十分というほどになってしまった。

という苛酷な状況下にあったということである。なお、「婦人公論」は翌年、昭和一九年三月号をもって休刊した。

(9) 本稿ではジョン・アーリが「観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行」(加太宏訳、平成七年二月三日、法政大学出版局)において

最低限、観光客が行く場所には、日常生活で習慣的に遭遇しているものとはつきり区別されるような、なんらかの様相があるはずである。

と述べたような意味で観光という用語を用いた。

(10) 小川和祐「堀辰雄『花あしび』試論」(『昭和文学研究』九、昭和五年七月一〇日)

(11) 谷田氏の前掲論文など。

(12) 以下、奈良の観光に関する法制等の記述は『奈良公園史』(昭和五年三月三十一日、奈良県)に拠る。

(13) 初版は大正八年五月三日、岩波書店より刊行された。

(14) 初版は昭和五年四月一日、馬酔木発行所より刊行された。

(15) 「ホトトギス」明治四〇年五月号(明治四〇年五月一日、ほととぎす発行所)に発表、後明治四一年一月一日、春陽堂より刊行の『鶏頭』に収録。

想像の大和路を行く旅人たち

(16) 鉄道省編『日本案内記——近畿下』(昭和八年三月二十八日、博文館)

(17) 水木要太郎「大和巡」(明治三二年四月一日、奈良県協賛会)

(18) 亀井勝一郎との対談「奈良の思ひ出」(昭和二〇年三月五、六、七日の三日間NHKラジオ「趣味の時間」に放送されたもの)である。引用は三月六日放送分からで、『会津八一全集』第一二巻(昭和五九年五月二十五日、中央公論社)に拠る。全集では録音テープを底本としている。

(19) 井上政次「大和古寺」(昭和一六年九月三〇日、日本評論社)の序には、

河合栄治郎氏が、一般教養人の奈良への関心と理解を少しでも高める為に是非書くやうにと熱心にすすめてくださったので、私も其の熱意に動かされてつい書く気になったのだが、果して多少でも其の御期待に副ひ得たかどうか。

とある。知識人や「一般教養人」が奈良についてのしかるべき書物を読む必要を感じていたと同時に、読むことを期待されていたことがわかる。

(20) 坂田静夫「大和史跡名勝案内」(昭和二二年二月三日、東洋図書)

(21) 安達忠一郎「鑿国の聖跡を巡る」(昭和一五年一月三日、大阪宝文館)

(22) 「近畿日本鉄道——80年のあゆみ」(近畿日本鉄道編、平成二年一月一日、近畿日本鉄道)

(23) 古川隆久「紀元二千六百年奉祝会開催イベントと三大新聞社(津金澤聰廣・有山輝雄編「戦時期日本のメディア・イベント」、平成一〇年九月一日、世界思想社)

(24) 『志賀直哉全集』第七巻(昭和四九年一月一八日、岩波書店)

(25) 『志賀直哉全集』第七卷（前掲）

(26) 『日本文化時報』四一（昭和二十三年四月、日本文化協会出版部）に
発表された。引用は『保田與重郎全集』第四卷（昭和六一年二月一五
日、講談社）に拠る。

(27) 初出は『日本評論』一四一―一四三（昭和十四年一月一日、同年二月
一日、同年三月一日）

〔付記〕 「大和路」各篇の引用は筑摩書房版『堀辰雄全集』第三卷（昭和
五二年二月三〇日）、「花あしび」後記の引用は同全集第四卷（昭
和五三年一月三〇日）に拠った。また、旧漢字については人名以外
はすべて新漢字に改めた。